春の新芽と共に

春の新芽と共に

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15094888

ヒュンマ

フレイザード戦後のお話です。この辺りの、ヒュンケルとクロコダインの会話って想像すると滾ります！！　マァムちゃんは姿が見えなくなるまで見守りそうだな……と。
アニメの展開があれなので、ほのぼのを放流する私(笑)

あと、ここでCMするのもあれですが、
illust/89237454
『棺の中で横たわる屍のように』2021GW発行
無事に通販予約が再開されました。値段が変わっております。
よろしければ、どぞ！！

春の新芽と共に

　フレイザードを倒した後、神殿跡地での祝宴はまだ続いていた。
　だが、ヒュンケルとクロコダインはその賑わいに背を向けて歩き出す。見送るのは少女が一人。
　満月が煌めく夜。
　不安げな視線が背中を追ってくるのが、何故だかくすぐったい。

「まだ、見送っているぞ」
　クロコダインの言葉に、ヒュンケルは振り返りたい気持ちを抑えて「ああ」と短く答えることしか出来なかった。
　不在でいることを不思議がられ探されることも、旅立ちを心配されることも、物言いたげに見送られるのも今まではなかった。
　魔王軍では仲間などおらず、他の軍団長は追い落とすべき存在でしかなかった。認められる存在は幾ばかりかはいたが、こんなふうに心があたたかくなるような存在はいなかった。
「ヒュンケル。お前さんは、随分とあの少女に心配されているようだな」
　クロコダインが豪快に笑いながら、ヒュンケルの背を叩く。
「痛いぞ、クロコダイン」
　ヒュンケルは気恥ずかしさに口をへの字に曲げながら、事実だけを告げる。
「おお、すまんすまん！」
　謝っているが、口調は楽しんでいるままだ。
　クロコダインは大袈裟に振り返って、まだ見送ってくれるマァムに手を振る。ブンブンと腕を振る音が耳に届く。
「ほら、ヒュンケルも手を振れ」
　未練がましい気がするが、自分だけ彼女を無視するのも嫌で、ヒュンケルは振り返り、彼女が見えるようにやや大袈裟に手を振る。

マァムはオレが手を振っていることにも気が付いて、両手でぶんぶんと手を振り返してくれていた。ぴょんぴょんとその場で飛び跳ねているのが可愛らしい。
「可愛らしいな」
「ああ」
　クロコダインの揶揄するような言葉に、ヒュンケルは思わず即同意をしてしまう。クロコダインは口元を緩めてからかうような視線でヒュンケルを見つめるが、ヒュンケルは気まずそうに視線を逸らすことしかできない。
「おまえも可愛いな。」
「ふざけるな」
　ふて腐れるようにヒュンケルはクロコダインに言い返すが、クロコダインはただ笑うばかりで相手にもしない。
「オレの方が……随分と年上なのだがな」
　ヒュンケルの自嘲めいた呟きに、クロコダインは顎に手を当てる。
「そろそろ、行くか」
「ああ」
　二人はまだ見送るマァムに背を向け、歩き出す。
　彼女は見送りを続けるだろうから、幾分急ぎ足で進む。早く宴に戻ってもらうために……
「……それを言うなら、オレのがおまえより随分年上だぞ」
　クロコダインの言葉に、ヒュンケルは見上げる。
「魔族の人生は長い……だからこそ、人間の短い人生に惹かれるのやも知れんな」
「……ああ」
　父親を亡くした六歳から……自分は成長しているのか……
　ヒュンケルは自問自答する。
　憎しみに時を止め、オレは成長をしていないのではないか……
　ダイにポップに、マァム……
　素直な彼らはたった数時間、数十分で凄まじい勢いで成長をしていく。
　兄弟子として彼らに誇れるようなところが、自分にあるのだろう

か……
「不思議な張り合いだな」
「不思議？」
　クロコダインの呟きに、ヒュンケルは首を傾げる。
「春の新芽のように、彼らはすくすく成長していく……そんなあいつらをただ見送るのはオレは耐えられん。鍛えねばな……」
　―――強くなりたい。
　その気持ちはよくわかる。
「そうだな……」
　年長者として、彼らを助けたい。
　味方になりたい。
　力になりたい。
　……そうであるためには、自分ももっと強くならなければならない。急成長を遂げる、妹・弟弟子達に負けないために、自分も成長をしなければ……
　こんなふうに力を欲するのは初めてだった。
　倒したい。ではなく、守りたいがために、力が欲しい。
「……クロコダイン、途中で組み手に付き合ってもらってもいいか？」
　ヒュンケルの願いに、クロコダインは笑みを浮かべる。
「オレも、同じことを考えていた」
「気が合うな」
　ヒュンケルは、こんなふうに穏やかにクロコダインと話すことに僅かばかりの違和感をくすぐったく思いながら受け入れる。
「守りたいから強くなりたい……というのは、いいな」
「ああ……心から同意する」
　ヒュンケルは満月を見上げて喉の奥を鳴らす。
「助太刀に入って、守られるようでは情けないからな」
「あいつらの足手纏いになるのだけは、辛抱堪らんな」
　お互いに最悪の状況を想像して、笑い合う。
「やはり、颯爽と助けに入りたいな」
「わかる」
「オレ達は考えが似ているな」

がははとクロコダインが笑うのに、ヒュンケルも笑顔を浮かべる。
「じゃあ、どちらがあいつらの役に立つか、競争だな」
「負けんぞ、ヒュンケル！」
　ヒュンケルとクロコダインは、これまでの生き方に背を向けるつもりで歩き出す。

　自分の背を見守る少女達に、みっともない背中は見せたくない。
　年上としてのつまらない矜持かも知れないが、その思いは……今までの鬱屈とした状況と比べれば、まるで春の風のように心地好く心の中を通り抜けた。

おしまい